

我が学びや

令和7年7月17日
白川小 学校便り No.3

文責:校長 村上剛史

学校教育目標: 自他を大切にし、学び合いを楽しみ、高め合う子どもの育成

重点取組: ①人が元気になる言葉、人がうれしい気持ちになる言葉をつかおう

②自分がされて嫌なことは、絶対に人にしない

◆「相手よりも先にする“あいさつ”」広がる！

5月の全校集会で、相手より先にする“あいさつ”について価値づけをしたところ、早速、翌朝から実行する児童が増え、今では8割以上の児童にその姿が見られるようになりました。当初、自信がなさそうな様子の子が、他の子の元気な挨拶に後押しされて、はにかみながら挨拶してくれました。翌日からは、徐々に挨拶の声が増え、表情も笑顔を伴うようになってきました。登校時に限らず、様々な場面において、出合った時に挨拶をしてくれる子がとても増えてきました。地域の方々からも「最近、自分の方から挨拶してくれる子が増えてきましたよ。さすが、白川の子ですね。」という言葉が掛けていただくことから、地域の方々も変容を感じ取られているようです。思い切って、一度、進んで挨拶したことで、爽快感、達成感を味わい、繰り返すことで次第に自己肯定感の向上にもつながっているはずです。

校長の話聞き、挨拶をされた人の心情を想像した力は「他者心理の理解力」、相手よりも先に挨拶しようとする目標をもって、挨拶ができた力を「自己理解力」と言います。

自己肯定感が高まること、そして、「他者心理の理解力」「自己理解力」が高まることによって、困難をしなやかに乗り越え回復する力である「レジリエンス」が促されていきます。この「レジリエンス」は、最近よく耳にする「非認知能力」の一つとされており、人間形成において非常に重要な資質能力と言われています。「たかが挨拶、されど挨拶」。家庭と学校がしっかりと連携することで、より教育的効果は高まります。子どものより良い育ちのために、頑張りましょう。

◆「白川っ子祭り」に期待すること

7月16日（水）2・3校時に「白川っ子祭り」が実施されました。これは、昨年度、熊本市教育センター「健康教育」研究モデル校の指定を受けて、「非認知能力を視点にした心と体の元気づくり」の実践の一つとして取り組んだものです。昨年度は、新本館落成を祝う会と並行して実施して、地域や保護者など多くの方々にご観覧いただきました。

今年度も、是非とも取り組みたいという児童の要望に応え、プロジェクト委員会が練り上げた企画を提案して、代表委員会でさらに検討が加えられました。一方、4年生以上の各学級においても、出し物についての話し合いを重ね、準備を進めてきました。

話し合いや準備を進める過程において、子どもたちは、さまざまな障壁にぶつかります。子どもたちは、これまでの学習や生活を通して培ってきた力を発揮して乗り越えようとします。その時を担任は見逃さず、助言や励まし、称賛により導き、価値つけていきます。そうやって、他者を意識した視点に立った構想力、折り合いをつけようとする力、自分の考えを相手に伝えるように話す力、他者の考えを受容したり共感したりする力がさらに育っていくと期待しています。そういう力も「非認知能力」の一つなのです。「白川っ子祭り」を仕掛けとすることで、子どもたちは「楽しみ」を見出しながら、出合う様々な問題を解決していく力を高めていきます。それは、友達と一緒に上級生の出し物を巡る立場の1～3年生にも同じことが言えます。

子どもたちには、学校は「楽しいところ」ではなく、「自ら楽しみを見出すところ」と感じ取ってもらえるといいなあと期待するところです。